

成人期前期の自己の発達に影響を及ぼす文脈の領域

—主体-客体面接で語られたテーマ領域から—

齋藤 信¹⁾

問題と目的

青年期以降の発達の過程は多様性に富み、様々な観点から検討されることが必要である。少なくとも義務教育を終えた青年の進路には進学か就職、いずれかを選択した後の進学先、就職先というように複数の選択肢が考えられ、青年期以降の日常生活とその延長上にあるライフコースは画一的には捉えることができないものとなっている。

青年期後期にあたる大学生の時期は本格的な自己形成の時期とされているが、彼らの日常生活や置かれた文脈も一様ではなく、各人が様々な文脈の領域で活動することにより、自己形成が促進されることが想定される。溝上(2001)は大学生1200名に面接調査を行った結果を報告し、彼らの自己評価に影響する文脈(大学生的文脈)として「大学受験」「学業」「クラブ・サークル活動」「キャンパス外活動」「アルバイト」「個人的読書」「就職あるいは大学院進学」「大学生の身分」「自由なキャンパスライフ」「下宿や寮での一人暮らし」の10カテゴリーを挙げている。また山田(2004)は大学生141名を対象に日常生活場面における主要な活動内容の自由記述を求め、大学生の自己形成に関わる活動として「授業・講義」「クラブ・サークル」「アルバイト」「自己研鑽」「遊び・対人関係」「生活習慣」の6カテゴリーを抽出している。これらの研究は大学生の自己形成に関わる活動や文脈が各人各様であることを示しているといえよう。

青年期が終わり成人期に入った人々の生活と文脈の幅はさらなる広がりを見せる。青年期後期から成人期前期にかけて人々は大きな生活の変化を経験することになるが、多くの人々が経験する最も大きな変化の要因は職業生活の開始と考えられる。Vaillant(1977)は成人期前期におけるEriksonの心理社会的葛藤として親密性ととも

に職業の確立もあると主張している。白井(2008)は学校から社会への移行に関する研究を概観し、フリーター、ニート、離職等の問題から海外・日本においても移行の困難さが高まっていることを指摘している。また亀井(2006)は現実に職場に入ったばかりの新人に短期間の縦断的な面接調査を実施し、彼らがどのように職場における自己の位置づけを変化させていくのか、さらに仕事分担や職場環境が新人の学びにどう影響するのかを考察している。

こうした学校から社会への移行や職場に参加した直後の過程が検討されている一方、新人の時期を過ぎた後の職業意識も検討されている。坂井(2006, 2007)は成人期前期(25-39歳)の転職観、坂井・半澤(2008)は同じく成人期前期有職者の目標意識について調査しており、これらの研究から成人期前期の人々はある程度仕事に慣れた後でも職業確立の葛藤に取り組んでいることが伺える。

成人期前期の生活の広がりやの要因として次に挙げられるのは家庭生活の変化であり、大きく分ければ以下の3点となるであろう。第1は親子関係の変化である。藤原・伊藤(2007)、北村・無藤(2008)、水本・山根(2010)は青年期および成人期の娘と母親の母娘関係が「母との同居・別居」「結婚」「子育て」などの影響を受け変化することを示している。第2はパートナーとの結婚とその後の夫婦生活である。例えば東海林(2006, 2009)は夫婦間に起こる対人葛藤が新婚女性によりどのように意味づけられ、それがどのように変化していくかについて考察している。第3は出産そして親となり子育てをすることである。岡本・菅野・根ヶ山(2003)は妊婦の胎動に関する日記を分析し、胎動に関する意味づけの変化について考察している。また柏木・若松(1994)は3-5歳の幼児の父母を対象に育児をすることによる親の発達の变化について考察している。

以上のように成人期前期は職業生活の開始と確立、および家庭生活における様々な大きな変化が起こる時期であり、そうしたライフイベントをどのように経験するかどうかで発達のライフコースの多様性はさらに増すといえ

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科大学院研究生。指導教員：平石賢二教授。

よう。渡邊・内山（2011）は独身勤労女性のライフコースと重視する生活領域、そしてアイデンティティとの関連について検討している。それによるとライフコースにおける仕事と家庭の両立に対する考え方の違いと「家庭」「職場」「余暇活動」「習い事」「友人関係」の5つの生活領域の中でどれを重視するか、さらにアイデンティティの感覚とが関連することが示されている。こうしたことから個人の生きる発達の文脈とそれに対してどのような意識を持っているかの違いは、自己やアイデンティティなど個人の意識の発達の要因に関連するといえよう。

本研究では成人期前期の人々の発達の要因となっている生活の文脈の領域を分類して検討することを試みる。成人期前期の人々の多様な生活は各人の発達に様々な影響を及ぼしていると考えられ、成人期前期の人々がどのような生活の文脈を重視しているかの検討には意義があると思われる。

こうした研究の目的のためにここでは Lahey, Souvaine, Kegan, Goodman, & Felix (1988) の主体-客体面接 (Subject-Object Interview, 以下, SOI) の手法を援用する。SOIはKeganの構造発達理論 (Kegan, 1982, 1994; Kegan, Noam, & Rogers, 1982) における発達段階を測定するための面接法である (詳細はLahey et al., 1988; 齋藤, 2008; 齋藤・杉本・亀田・平石, 2011を参照)。Keganの構造発達理論は認知構造発達を基礎とする自己の発達理論であり、その発達段階は主体と客体のバランス (主体-客体均衡) で規定される (Table 1)。主体とは「自己の経験の意味づけの根幹にあり、自己がそこに従属し心的な距離を取ることができない、客観的に思考できない領域」であり、客体とは「自己が心的な距離を取ることができ、客観的に思考できる領域」である。SOIでは参加者の「何がどのくらい主体となっており何がどのくらい客体となっているか」を明らかにするために、参加者が面接の中で客観的に語って説明できたことと (客体) とそうできなかったこと (主体) を分別して Table 1 の段階に対応する段階得点に換算して評定を行う。

ここでSOIにて扱われる面接のテーマが選択されるまでの流れを説明する。SOIでは参加者が面接でどのようなテーマを話すかの選択と準備を促すために、面接の開始前に感情に関するカードを呈示する。感情のカードは「①怒り ②不安・緊張 ③成功 ④強い立場・信念 ⑤悲しみ ⑥引き裂かれた感情、または迷い²⁾ ⑦感動したこと ⑧何かを失ったこと ⑨変化 ⑩自分にとって大切なこと」の10枚であり、参加者はカードの教示に基づき、参加者にとって強い感情が生じた自身の出来事や内容 (面接のテーマ) を記入する。記入するカードの枚数や記入

方法は参加者に任されており、参加者は自身にとって「印象に残った、話しやすい」カードを選んで記入する。例えば「1枚のカードについて異なる2つの出来事が思い浮かんだ場合」「1つの出来事で2つのカードに関連する感情があった場合」も自由に記入して構わない。参加者は面接の中でも面接者から「印象に残った、話しやすい」カードに書いたテーマを選択して話すように促される。以上がSOIにおけるテーマ選択の流れである。

前述の通りSOIはKeganの構造発達段階の測度であり、語られたテーマが自己の構造を示す手がかりとなっていることが測定の根拠となっている。こうしたことから参加者が面接の場で「印象に残った、話しやすい」ものとして選択した面接のテーマは彼らの自己の発達に影響している文脈として検討する意義があると思われる (齋藤, 2009; 齋藤他, 2011)。

本研究では成人期前期の人々にSOIを実施し、面接で語られたテーマを領域別に分類することで成人期前期の人々の自己の発達に影響を及ぼす要因となっている文脈について検討することを目的とする。

まず第1の目的は成人期前期の人々と大学生により語られたSOIのテーマ領域を比較することにより、成人期前期の人々の自己の発達に影響を及ぼす文脈の特徴を検討することとする。大学生を対象としたSOIで語られたテーマ領域の検討は齋藤 (2009)、齋藤他 (2011) において行われている。前述の通り成人期前期は学業を終えて本格的な職業生活に入ることに代表される大きな変化の時期であり、成人期前期の人々の発達に影響を及ぼす文脈が学生の時期と比べてどのように異なる特徴を示すのかは検討すべきものと思われる。

次に第2の目的は成人期前期における職業生活、家庭生活に関するテーマの特徴について検討することとする。成人期前期は職業生活と家庭生活において多くの重要なライフイベントが生起する時期と考えられ、それらがどのように成人期前期における発達の重要な文脈となっているかについて考察する必要があると思われる。

成人期前期の人々の生活は多様性に富み、様々な角度からの検討が必要である。こうした成人期前期の発達に影響する多様な文脈を検討していくことに本研究の意義があると思われる。

2) 原版のLahey et al. (1988) では“Torn (tearの過去分詞形)”。齋藤他 (2011) の大学生の調査では「引き裂かれた感情」のカードであったが、「板挟みになる、ジレンマに陥る」という語意を重視して成人期前期の調査では「迷い」のカードとした。

Table 1 Kegan の構造発達段階

Kegan	年齢段階	主体	客体
0. 未分化な自己	乳児期	反射 (感覚, 運動)	なし
1. 衝動的な自己	幼児期	衝動, 知覚	反射 (感覚, 運動)
2. 尊大な自己	児童期	欲求, 関心, 願望	衝動, 知覚
3. 対人関係的な自己	青年期 前期・中期	対人関係, 相互性	欲求, 関心, 願望
4. システム的な自己	青年期後期 成人期	創造者的感覚 (authorship), アイデンティティ 精神的統制, イデオロギー	対人関係, 相互性
5. 個人間相互的な自己	成人期以降	個人間相互性, 自己システム同士の相互浸透能力	創造者的感覚 (authorship), アイデンティティ 精神的統制, イデオロギー

注) Kegan (1982), 齋藤他 (2011) に基づき作成。

Table 2 参加者の構成と基本属性

成人期前期					
職業	最終(現)学歴	親との居住	婚姻	子ども	勤務形態
会社員 16	大学院後期	25-29歳	25-29歳	25-29歳	25-29歳
	7	別居	既婚	あり	フルタイム
学校法人職員 9	大学院前期	10	5	1	12
公務員 3	8	同居	未婚	なし	それ以外
大学院生 3	四年制大学	8	13	17	6
大学の研究員 2	21	30-35歳	30-35歳	30-35歳	30-35歳
専業主婦 2	短期大学	別居	既婚	あり	フルタイム
非常勤職の兼務 2	1	18	6	4	17
カウンセラー 1	専門学校	同居	未婚	なし	それ以外
教員 1	1	4	16	18	5
看護婦 1	高等学校	2			

注) 数字は人数を示す。

方法

参加者と調査時期

成人期前期 (25-35歳) の参加者は40名 (男性・女性各20名), 平均年齢は男性30.6歳 (26-35歳), 女性29.6歳 (25-35歳) であった。参加者の構成と基本属性は Table 2 の通りであった。募集は, 著者の友人・知人の紹介を通して行い, 募集時に謝礼を渡す旨を告知した。調査の実施時期は2009年8月から2011年1月であった。

3) 本研究は研究科の倫理審査を経て承認を受けている (承認番号 PR10-50)。

また研究の目的 1 における比較の対象は齋藤他 (2011) における大学生 40 名 (男性・女性各 20 名), 平均年齢は男性 20.5 歳 (19-23 歳), 女性 20.3 歳 (18-25 歳) であった。

測度

① SOI 日本語版 (齋藤, 2008)

② 基本属性と別の研究で使用する尺度を 1 冊にまとめたもの。

調査手続き

面接は著者 (男性) と心理学専攻の大学院生の女性 1 名の合計 2 名が実施した。調査は大学の心理実験室, 外部の会議室, 参加者の自宅で個別に実施された。調査の開始にあたっては研究の倫理³⁾ に配慮し, 参加者に「調

査の内容と目的」「答えたくない質問には答えなくてもよいこと」「調査結果の公表にあたってはプライバシーが保護されること」「面接調査はいつでも中止してよいこと」を説明したうえで、録音の許可を得て調査参加の同意書に署名してもらった。面接は1時間の予定で実施され、実際にかかった時間は45～90分であった。調査終了時には「面接で話した内容の重要度や関心の強さ⁴⁾」「今後の調査依頼」「調査を受ける立場での改善点の有無」「調査後の感想」に関するアンケートを実施した。面接は録音され、後日分析のために逐語録が作成された。全体の調査終了時には、謝礼として図書カードを手渡した。調査全体の所要時間はおおよそ2時間から2時間半であった。

結果

SOIにおいて語られたテーマを領域別に分類した結果をTable 3に示す。Table 3-1は成人期前期の人々を、Table 3-2は齋藤他(2011, Table 5)で報告された大学生を対象とした結果を基に作成されたものである。本研究における成人期前期のテーマ抽出の過程も大学生対象の齋藤他(2011)の手法に則ったものであり、以下に説明する。問題と目的で述べた通りSOIで語られるテーマは参加者による自由選択に基づき記入されたカードから生成されたものである。面接者が参加者に「カードに書いた出来事や内容の中で何か話しやすいものはありますか」と訊ねると面接者はカードとそこに記入した出来事や内容、それに関する感情や思考を概説する。この部分をSOIにおける内容(content)と呼ぶ(Lahey et al., 1988)。面接者はこの内容を起点に「なぜそう思ったのか」「そのことについてあなたが最もその感情を感じたのはどのようなことか」といった構造探索の質問で参加者の感情、思考を生起させている認識の枠組みとしての構造(structure)を探索していく(詳細は齋藤他, 2011を参照)。Table 3において抽出された面接のテーマは参加者がカードに記した内容について語った内容の部分に限定して抽出された。また問題と目的で述べたように「1枚のカードについて異なる2つの出来事が思い浮かんだ場合」では2つのテーマ、「1つの出来事で2つのカードに関連する感情があった場合」には1つのテーマとしてカウントした。面接全体で十分な構造探索のテーマとして扱うことができるのは2つから3つのテーマであるが

(Lahey et al., 1988; 齋藤他, 2011)、今回のテーマの抽出では十分な構造探索のテーマとして扱われず面接の流れの中で簡単に触れられただけのテーマも抽出した。

Table 3のテーマ領域の分類は著者が行い、成人期前期、大学生それぞれの中で妥当と思われるテーマ領域、下位領域のラベリングを行った。これらの作業は成人期前期と大学生の結果で独立に行ったため、同じ下位領域の名称でも別のテーマ領域に入っている場合もある(例えば、恋愛)が、成人期前期と大学生の文脈の違いからこのように分類されている。テーマ領域を語った人数については成人期前期、大学生とも以下の通りカウントした延べ人数となっている。例えば1名の参加者が「職業・仕事」のテーマ領域を複数回語っていた場合でも「職業・仕事」には1名をカウントした。一方、例えば1名の参加者が面接で「職業・仕事」「生活」のテーマ領域を1回ずつ語っていた場合には「職業・仕事」に1名、「生活」に1名をそれぞれカウントした(齋藤他, 2011, Table 5)。このためTable 3の人数は本研究の成人期前期、齋藤他(2011)における大学生のSOIにおいてどのくらい多く語られたテーマ領域であるかを示すといえる。以上のような分析方法の前提の下に研究の結果を述べる。

1. 大学生の結果と比較した成人期前期で語られたテーマ領域の特徴

成人期前期の人々がSOIで語ったテーマを分類したところ、13のテーマ領域(Table 3-1)が抽出された。これを大学生がSOIで語ったテーマを分類した14のテーマ領域(Table 3-2)と比較すると以下のようなことがいえる。

まずいえることは、成人期前期では成人期の開始に伴うライフイベントやこの時期特有の文脈に関わるテーマ領域が新たに出現したり語る参加者が増加している一方、学生の時期特有のテーマ領域がなくなったり語る参加者が減少していることである。

成人期前期において新たに出現したり語る参加者が増えたテーマ領域に関して具体的にいえば「職業・仕事」が新たに出現して最も多く語られていること、「家族・親族」の順位が上昇していること(大学生では9位、成人期前期では3位)、「恋愛・結婚」が新たに出現していることである。順位の変動とともに「家族・親族」における下位領域は大きく変化している。成人期前期においては親との関係(結婚を機に自立)、子の誕生・親となること、妊娠・出産(感動、体調管理の注意)、子育て・夫婦(子の成長に感動、夫との関係と自身の変化)のように成人期特有のライフイベントに関する内容が多く語られている。また「恋愛・結婚」の下位領域を見ても同様に結婚の迷い、恋愛、同棲、結婚式など、具体的な人

4) 齋藤他(2011)における「面接のテーマごとに参加者にとっての重要度や関心が異なる可能性」の指摘に基づき、成人期前期の調査では面接終了後に確認することにした。

Table 3-1 SOI で語られたテーマのカテゴリー（成人期前期）

テーマ領域 ¹	人数 ²	主な下位領域（主な内容）
1. 職業・仕事	30	<u>配置転換</u> （影響・変化，自身の希望）， <u>仕事内容や作品への評価</u> （自分からと他者から，自分に向けてと他者に向けて）， <u>仕事の姿勢</u> （自分に関するものと他者に向けてのもの）， <u>転職</u> （過去の経験，現在の活動，迷い）， <u>役職や立場</u> （部署間の対立，社員同士の違い，責任ある立場）， <u>イベントやプロジェクト</u> （達成感・充実感）， <u>利用者・顧客・教え子への対応</u> （葛藤・トラブル）， <u>同僚や上司との関係</u> （上司への怒りや不満，怒られることへの不安）， <u>転勤</u>
2. 生活	18	<u>公共マナー</u> （通勤電車のマナー，車の運転）， <u>日常生活</u> （季節のうつろい，日々考えること）， <u>健康・身体</u> （疲れやすさ，体力の低下）， <u>生活の変化</u> （結婚・転勤・就職による）， <u>家庭と仕事の両立</u> （実家と仕事，出産と仕事）， <u>将来・人生設計</u> （結婚後と子育て後の自分）， <u>一人暮らし</u> （自立の希望，一人暮らしへの適応）
3. 家族・親族	13	<u>家族の大切さ</u> ， <u>親との関係</u> （結婚を機に自立）， <u>子の誕生・親となること</u> ， <u>妊娠・出産</u> （感動，体調管理の注意）， <u>子育て・夫婦</u> （子の成長に感動，夫との関係と自身の変化）
4. 趣味・余暇	12	<u>芸術鑑賞</u> （本・音楽・映画）， <u>地域のクラブ活動や習い事</u> ， <u>自己学習</u> （英語や講演会）， <u>スポーツ観戦</u>
5. 価値観	8	<u>心がけていること</u> ， <u>重視・大切にしているもの</u> ， <u>目標・理想</u>
6. 自己概念	6	<u>パーソナリティ傾向</u> （自分はどのような人間か）， <u>他者から見た自分</u> （どう思われているか）
6. 恋愛・結婚	6	<u>結婚の迷い</u> ， <u>恋愛</u> ， <u>同棲</u> ， <u>結婚式</u>
8. 死別体験	3	<u>ご家族</u> ， <u>仕事関係</u>
8. 友人	3	<u>仕事の同僚</u> ， <u>友人の結婚</u>
10. 人間関係他	2	<u>取引先</u> ， <u>卒業した学校やクラブのOB・OG</u>
11. 課外・学外活動	1	<u>学校行事</u>
11. 学業	1	<u>大学院進学で経験し学んだこと</u>
11. 基本感情	1	<u>生命や身体の危険</u>

1) テーマ領域の数字はその領域を語った参加者の延べ人数の多さの順位を示す。

2) 人数の数字はそのテーマ領域を語った参加者の延べ人数を示す。

Table 3-2 SOI で語られたテーマのカテゴリー (大学生)¹

テーマ領域 ²	人数 ³	主な下位領域 (主な内容)
1. 生活	17	<u>生活習慣</u> (早寝早起き, 整理整頓), <u>健康</u> , <u>時間</u> (諸活動の忙しさとバランス), <u>一人暮らし</u> (自由と責任による成長), <u>公共マナー</u> (駅での割り込みや車内での通話や騒音)
2. 学業	16	<u>試験・単位</u> (結果や単位の不安), <u>授業</u> (内容や発表場面), <u>卒論</u> , <u>教育実習</u> (生徒との関係), <u>留学</u> (体験による変化), <u>自己学習</u> (思想や哲学などの読書)
2. 友人	16	<u>葛藤・対立</u> , <u>大切さ</u> , <u>喜び</u> , <u>別れ</u>
4. 課外・学外活動	15	<u>部活動・サークル</u> (試合や演奏会, リーダーや主要なイベントの係り), <u>学校行事</u> (文化祭のリーダーや実行委員), <u>学外のイベント</u>
5. アルバイト	10	<u>家庭教師</u> , <u>塾講師</u> , <u>個人指導</u> , <u>学童保育</u>
5. 自己概念	10	<u>パーソナリティ傾向</u> (自己内省, 対人場面での自己), <u>他者から見た自己</u> (他者にどう思われているか, どう思われたいか)
7. 進路	9	<u>就職</u> , <u>大学入試</u> , <u>大学院入試</u> , <u>編入学</u> , <u>決めることの葛藤</u>
8. メディア	8	<u>映画</u> , <u>TV</u> , <u>ネット</u> , <u>社会問題</u>
9. 家族・親族	7	<u>親子</u> , <u>きょうだい</u> , <u>祖父母</u> , <u>家族の大切さ</u>
9. 価値観	7	<u>人間関係</u> (大切さや気をつけていること), <u>自己の行動指針や目標</u>
11. 人間関係他	5	<u>恋愛</u> , <u>先輩・後輩関係</u> , <u>家族ぐるみの付き合い</u> , <u>あまりよく知らなかった人の親戚</u>
11. 趣味	5	<u>読書</u> , <u>ゲーム</u> , <u>旅行</u> , <u>自然への感動</u>
11. 死別体験	5	<u>祖父母</u> , <u>恩師</u> , <u>友人</u> , <u>未経験であることへの不安</u>
14. 基本感情	3	<u>生命や身体への危険</u> (事件や事故に遭いそうになった), <u>基本的な恐怖</u> (大きな虫)

1) 齋藤他 (2011) の Table 5 を基に作成。

2) テーマの数字はその領域を語った参加者の延べ人数の多さの順位を示す。

3) 数字はそのテーマ領域を語った参加者の延べ人数を示す。

生設計を見据えたものとなっている。

同じくなくなったり語る参加者が減少したテーマ領域は「学業」「課外・学外活動」「アルバイト」といった学生生活特有の文脈に関するものである。同様に「友人」も大学生では上位 (2位) にあったものが成人期前期では下位 (8位) になっている。

以上のように成人期前期の人々と大学生にSOIを実施した結果の比較から成人期前期になると関心を持つテーマ領域が変わり, 重視する文脈も移行していくことが考えられる。

2. 成人期前期における職業および家庭生活におけるテーマの特徴

ここでは成人期前期における職業生活, 家庭生活のテーマ領域についてより詳細な検討を試みる。

2-1. 職業生活におけるテーマ領域の特徴の検討

「職業・仕事」のテーマ領域における主な下位領域は9つに分類されているが (Table 3-1), この中で成人期前期における職業の確立過程に関連すると思われる以下の3つの下位領域を取り上げる。

配置転換

配置転換の下位領域は (影響・変化: 配置転換の影響による心境や生活の変化) と (自身の希望: 配置転換の希望を持っていること, 希望して異動したこと) の主に2つの内容に分けられた。

前者の (影響・変化) では「新しい仕事に変わった当初は苦勞があったが最近は大分慣れてきて自分が成長したと感じた (学校法人職員, 20歳代後半, 男性)」「出向先の仕事を始めてしばらく経つが最近では信頼されて仕事を任せられるようになった (会社員, 30歳代前半, 男性)」

と言った肯定的な変化と「今まで慣れ親しんでいた仕事を替わるようになったが後任の人にあまり良い感情を持たず複雑な気持ちだ。また新しい部署でうまくやっていると不安である（会社員、30歳代前半、男性）」といった否定的な感情が語られた。

後者の（自身の希望）では「社内ですべて自分が関心を持っているメンタルトレーニングの仕事ができる部署に異動したい。現在の仕事は自分に合っていないと感じている。会社に希望を出しているがなかなか通らない（会社員、30歳代前半、女性）」「入社して10年同じ仕事をしているので自分の仕事の幅を広げるため、そろそろ別の部署に異動したい（会社員、30歳代前半、男性）」「TV局で事務系の仕事をしてきたが将来のキャリアのため、希望を出して番組制作の現場に異動した。今は苦勞しているが将来の仕事のためにがんばりたい（会社員、20歳代後半、男性）」といったように自身の適性や今後のキャリアを考えて社内での仕事を変えたいという希望が語られた。

転職

転職の下位領域は（過去の経験：転職をした経験による変化）、（現在の活動：現在、転職活動中であることへの思い）（迷い：転職するべきかどうかの迷いやためらい）の主に3つの内容に分けられた。

（過去の経験）では「以前は郵便局に勤めていたが図書館司書の資格を取り図書館に勤めることができた。当時は迷いもあったが現在は転職して良かったと思う（学校法人職員、20歳代後半、女性）」のように転職が成功した経験に基づく肯定的な変化が語られた。

一方、（現在の活動）では「30代を前に前職を退職して現在転職活動を行っている。なかなか成果が出ないときはそれで良かったのか時々悩むことがある（学校法人職員、20歳代後半、男性）」といった葛藤の感情が語られた。

また（迷い）は年齢と仕事の成熟の度合いによりさらに2つに分けられた。1つは仕事を始めたばかりの参加者の「今の仕事に慣れず自分が向いているのがよく分からない。このまま続けていけるかどうか不安である（教員、20歳代前半、女性）」といった迷いである。これに対し「30歳になり現在の仕事を続けていいのかわからないのか、続けていけるのかわからないか不安である（会社員、30歳代前半、女性）」「現在の仕事は嫌いではないが必ずしも好きではなく、機会があれば転職したいと思っている。先日、同業他社の人から良い転職の話の誘いを受けたが最終的には自分のしたいことができるかどうか分からなかったので強い信念でお断りした（会社員、30歳代前半、男性）」といったようにある程度仕事に慣れてきている30歳代

の参加者が簡単に転職に踏み切れない迷いも語られた。

役職や立場

役職や立場の下位領域は（部署間の対立：異なる部署間の立場の違いによる対立）、（社員同士の違い：正社員と契約社員の立場の違い）、（責任ある立場：重要な立場になったり部署に長く居る立場になることの変化）の主に3つの内容に分けられた。

（部署間の対立）では「自分は営業の部署で受注を取ってくるが工場の生産担当の部署が昔からの慣習で生産計画を杓子定規に押し付けてくる。生産担当の部署は時代に合った柔軟な対応をして欲しい（会社員、20歳代後半、男性）」といった部署による考え方の違いに対する怒りや不満が語られた。

（社員同士の違い）では「自分は正社員だが会社では契約社員も雇用しているため、仕事上で様々な立場の違いを感じることもある。また正社員としての責任を感じることがある（会社員、20歳代後半、女性）」といった雇用形態による違いと責任についての語りが見られた。

（責任ある立場）では「職場で自分が一番長くいる立場になり職場の様々な人に意見を求められるようになった。異なる役職・部署の人も意見を求めてくるので、私の意見が完全に正しいものではなく、それぞれの立場で判断して欲しいということを伝えるようにしている（カウンセラー、30歳代前半、女性）」「自分はまだ役職に就いていないのに重要な会議に出たりして役職がある人と同じような扱いになっている。会議などでは“自分がこの会議に出席して発言してよいか”といったことを考えて緊張することがある（学校法人職員、30歳代前半、男性）」といったように職場での立場が変わっていくことによる責任とそれに対する思いが語られた。

2-2. 家庭生活におけるテーマ領域の特徴の検討

「家族・親族」のテーマ領域における主な下位領域は5つに分類されており（Table 3-1）、ここでは以下の通り2つの下位領域と子どもに関連する3つの下位領域の結果をまとめて述べることにする。

家族の大切さ

成人期前期における家族の大切さの下位領域の特徴は、大切に家族として両親、祖父母、きょうだいとともに伴侶（パートナー）、子どもが新たに加えられることである。以下に述べるように結婚、出産、子育てといったライフイベントを経験した人々にとって新たにできた家族が非常に大切に思われていることが伺える。

親との関係

親との関係の下位領域では「結婚とともに親と心理的に距離を取れるようになった。自分が成長したように感じる（会社員、20歳代後半、男性）」といった、結婚を

契機とする親からの心理的な自立に関する思いが語られた。

子どもに関する下位領域

以下に述べるものはいずれも子どもに関する下位領域であり、ライフイベントが生起する順に結果を述べる。

妊娠・出産の下位領域では「子どもが授かり一つの命が産まれていくことに感動している（学校法人職員、20歳代後半、男性）」「胎動に感動している（大学の研究員、20歳代後半、女性）」といった生命の誕生への喜び、また「妻の体調が心配で是非母子とも無事に出産して欲しい（学校法人職員、20歳代後半、男性）」「出産が近いので自分がインフルエンザにかからないか心配だ（大学の研究員、20歳代後半、女性）」といった妻や自身の妊娠・出産前の体調の心配が語られた。

子の誕生・親となることの下位領域では「子どもが産まれて感動した。父親となり子どもを大切に思い、今はそのことで頭が埋まっている（公務員、20歳代後半、男性）」といった子どもの誕生により親となることの喜びと子どもを大切に思う気持ちが語られた。一方、「現在は一児の母であるが2人目の子どもを妊娠中で、二児の母となれば独身で会社員として働いていた頃、さらに一児の母である現在と異なる気持ちになるだろう」といった自身を振り返る語りも見受けられた。

子育て・夫婦のテーマの下位領域では「2歳の娘のトイレの成長に感動した。また最近は母親を伴わなくとも父親である自分だけで娘と外出して遊べるようになった（会社員、30歳代前半、男性）」といったように父親として娘の成長と子育てに関わっている喜びが語られた。一方、「娘がお父さん（夫）にイヤイヤをするので困っていた。子育てサークルに通ったところ子育てを経験した年配の母親たちから助言をもらい、娘との会話にできるだけお父さんへの感謝の言葉をいれるようにしたところ、娘のイヤイヤが減った（専業主婦、30歳代前半、女性）」といったように子育ての課題に取り組み解決に向かう語りも見受けられた。

考察

1. 大学生の結果と比較した成人期前期で語られたテーマの特徴

SOIで語られたテーマ領域は成人期前期と大学生でいくつかの違い、変動が見られた。成人期前期では「職業・仕事」「家族・親族」のテーマ領域を語る参加者が増え、学生生活の文脈に関係する「学業」「課外・学外活動」「アルバイト」「友人」のテーマ領域を語る参加者は減少した。この結果は大部分の人々が学生生活を終え、成人期の生活に入ることに伴う妥当なテーマ領域の移行といえよ

う。結果でも述べた通り大学生で多くの参加者が語った「学業」「課外・学外活動」「アルバイト」「友人」の4つの文脈の重要性は成人期前期になって失われるのではなく他の文脈に置き換わっている可能性が考えられる。学生の本分としての「学業」、収入を得る手段としての「アルバイト」は社会人の「職業・仕事」に移行していると考えることが妥当であろう。大学生における「友人関係」の文脈も成人期前期では「職業・仕事」「家族・親族」における人間関係に移行していることが推測される。同じく大学生の「課外・学外活動」のスポーツや文化活動自体は成人期前期では「趣味・余暇」の文脈に引き継がれている可能性がある。また齋藤他（2011）は「課外・学外活動」においてリーダーや主要なイベントの係りを務めた経験が大学生により印象深く語られていることを指摘したが、成人期前期においては「職業・仕事」におけるイベント・プロジェクトの下位領域が達成感・充実感を味わう重要なものと捉えられている。ここから成人期前期、大学生のいずれにおいても自らが責任を持って取り組んだ経験は個人にとって大切なものであり、自己の発達に影響を及ぼすものである可能性が示唆される。

本研究の結果からも成人期前期は成人としての生活が始まる時期であり、就職・結婚・出産・子育てなど、この時期に生起しやすい重要なライフイベントとつながりが深い「職業・仕事」「家族・親族」に関わる文脈が自己の発達にとって重要なものとなっていく時期であることが示されたといえよう。

2. 成人期前期における職業および家庭生活におけるテーマの特徴

2-1. 職業生活におけるテーマの特徴の検討

本研究において配置転換の下位領域は（影響・変化）と（自身の希望）に大別された。前者においては配置転換が成人期前期の人々にとって成長感や達成感もしくは葛藤を産み出す大きな変化の機会として受け取られていることが示されたと考えられる。

後者の（自身の希望）と転職の下位領域は組織内での異動と組織の外に出て仕事を変えることで意味合いは大きく異なるものの、いずれも成人期前期の人々に職場や仕事を変えたい希望があることを示しているといえる。坂井（2006, 2007）は成人期前期（25-39歳）における転職理由、転職観を検討しており、それによると転職は今日の日本の社会においては個人の職業人生におけるメジャーな選択肢の一つであり、マイナスイメージでは捉えられなくなっている。本研究からも配置転換を含めた職場や仕事を変えることで「自分に合った仕事があったい、将来のために自分の能力を高めたり仕事の幅を広げたい」といった成人期前期の人々の希望が示されたとい

える。一方、本研究の結果からこうした職業を変えたい希望が叶わなかったり、それに踏み切れない場合の葛藤や焦りも語られた。西村(2009)は成人期前期の人々が職業の確立といった成人期前期の発達課題に関する取り組みの過程で焦りの気持ちを持っていることを指摘しており、本研究からも自身の適職と思える職業を確立しようとする成人期前期の人々の取り組みと葛藤が示されたと考えられる。

役職・立場の下位領域では成人期前期の人々が現在働いている職場で様々な役職・立場にあることが示された。(部署間の対立)、(社員同士の違い)では成人期前期の人々が自分の所属する部署や社員の枠組みを代表して(同じ組織内の)他のグループと対立したり葛藤を感じる様子が示された。Erikson(1950/1977)はアイデンティティの形成における社会的役割と所属する集団への同一視の影響を指摘しておりこのような経験が成人期前期の人々のアイデンティティ形成に影響している可能性が考えられる。(責任ある立場)では、本研究の参加者の年齢では後半になる30歳代前半の人々が職場で重要な役割を期待されるようになり、その責任を感じていることが語られた。30歳代に入った成人期前期の人々は既に新人の時期を終え職場の中で少しずつ責任ある立場となって行き、時に葛藤を感じながらも自らの職業を確立していく様子が見てとれる。

以上のように本研究の職業生活におけるテーマの特徴の検討から成人期前期の人々にとって職業や仕事は非常に重要な生活の文脈であり、彼らが職業確立の葛藤(Vaillant, 1977)に取り組む過程にあることが示されたと考えられる。

2-2. 家庭生活におけるテーマの特徴の検討

家庭生活におけるテーマ領域の検討では、成人期前期の家族生活が結婚・出産により拡大する時期であり、子育てへの取り組みにより大きく変化する時期であることが示された。まず親との関係の下位領域では結婚してパートナーができたことが親子関係の変化をもたらすことが示された。また子どもに関する妊娠・出産、子の誕生・親となること、子育て・夫婦の下位領域では新たに家族となったパートナーや子どもを気遣い大切に思う気持ち、子育てが生活の中心となりそれに取り組む様子が示された。ここにはErikson(1959/1973)が掲げた成人期前期の葛藤である親密性の確立と中年期の葛藤である世代性の萌芽(Kroger, 2000/2005)への取り組みが示されていると考えられる。「家族・親族」以外のテーマ領域でも「結婚して子どもができたことで考えが変わってきた。仕事をしていた当時は自分を高めようと生き急いでいたが今は家族や子育てを大切に思い、ゆっくと生き

ている(「生活」のテーマ領域;専業主婦, 30歳代前半, 女性)」といったように結婚と子育てが成人期前期の生活を大きく変えることが示されている。一方、「結婚・恋愛」のテーマ領域では「自分はもう結婚すべき歳だと思いがなかなか結婚して家族を養う一人前の人間である自信が得られない(学校法人職員, 20歳代前半, 男性)」といった不安が語られ、成人期前期に期待される発達課題の達成に関する焦り(西村, 2009)も示された。やはり成人期前期の人々にとって結婚に代表される親密性の確立は非常に重要な位置を占めているといえよう。

子の誕生・親となること、子育ての下位領域では男性・女性ともに子どもを大切に思い、育児に取り組んでいることが語られた。柏木・若松(1994)は親となることの変化について父親と母親の違いを考察し、父親が育児・家事に参加することで「母親の育児に対する否定的感情の軽減」「父親自身の子どもへの肯定的感情の強まり」などの肯定的な影響が生じることを挙げている。本研究の父親となっている参加者からも「妻の負担を減らすよう子育てにはできるだけ参加したい(会社員, 30歳代前半, 男性)」といったことが語られており、こうした夫婦における子育ての協力姿勢が成人期前期の家庭生活を充実したものとさせる可能性が考えられる。

以上のように成人期前期は結婚・出産・子育てなどのライフイベントが生起する時期であり、家庭生活における大きな変化の時期であること、成人期前期の人々は家庭生活における親密性(夫婦関係)、世代性の葛藤に取り組む始めている時期であることが本研究からも示されたと見える。

まとめと今後の課題

本研究では成人期前期の人々にSOIを実施し、面接で語られたテーマ領域をカテゴリー化して抽出することで成人期前期の人々の自己の発達に影響を及ぼす要因となっている文脈について検討した。成人期前期の人々の生活では大学生と比べて職業生活、家庭生活の文脈の重要性が高まることが示された。また職業生活、家庭生活に関するテーマ領域の検討から成人期前期の人々が職業確立、親密性、世代性の葛藤に関連するテーマに取り組んでいることが示された。Kroger(2000/2005)は成人期前期がそれまでの学生時代に形成されてきたアイデンティティを現実社会に応用する時期であるとしている。成人期前期はこの時期に生起する就職・結婚・出産・子育てといった生涯発達における重要な節目のライフイベントが生起しやすい時期であり、成人期前期の人々の自己、アイデンティティはこうした現実の生活の文脈の中で発達していく可能性が本研究からも示されたと考えられる。

本研究の限界と今後の課題については以下の通りである。Table 2に示す通り本研究の参加者の基本属性には偏りがあるため、Table 3における語られたテーマ領域の延べ人数の多さの順位や研究の目的1における大学生の結果との比較の解釈には注意が必要である。また本研究では成人期前期の人々の発達に影響を及ぼす文脈について示したが、それらがどのように彼らの自己の発達に影響しているかの詳細な検討はなされていない。こうしたことから両者がどのような関係にあるかを少しでも説明することが今後の課題と考えられる。本稿の冒頭にも述べたように青年期以降の成人期の発達の道筋は多様なものであり、成人期前期に起こりやすいライフイベントを経験しなかったり、別の時期に経験するといったことも考えられる。こうした点からも成人期前期の発達の様態を明らかにするためにはさらなる研究の蓄積が必要と考えられる。

引用文献

- Erikson, E.H. (1950). *Childhood and society*. New York: W.W. Norton & Company.
 (エリクソン, E.H. 仁科弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会 みすず書房)
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: International Universities Press.
 (エリクソン, E.H. 小此木啓吾 (訳) (1973). 「自我同一性」アイデンティティとライフサイクル 誠心書房)
- 藤原あやの・伊藤裕子 (2007). 青年後期から成人期初期にかけての母娘関係 青年心理学研究, 19, 15-26.
- 亀井美弥子 (2006). 職場参加におけるアイデンティティ変容と学びの組織化の関係: 新人の視点から見た学びの手がかりをめぐって 発達心理学研究, 17, 14-27.
- 柏木恵子・若松素子 (1994). 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5, 72-83.
- Kegan, R. (1982). *The evolving self: Problem and process in human development*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Kegan, R. (1994). *In over our heads: The mental demands of modern life*. MA: Harvard University Press.
- Kegan, R., Noam, G.G., & Rogers, L. (1982). The psychology of emotion: A neo-Piagetian view. In D. Cicchetti & P. Hesse (Eds.), *New directions for child development: Emotional development*. San Francisco: Jossey Bass, pp.105-128.
- 北村琴美・無藤 隆 (2001). 成人の娘の心理的適応と母娘関係: 娘の結婚・出産というライフイベントに着目して 発達心理学研究, 12, 46-57.
- Kroger, J. (2000). *Identity development: Adolescence through adulthood*. Thousand Oaks, CA: Sage.
 (クロガー, J. 榎本博明 (編訳) (2005). アイデンティティの発達: 青年期から成人期 北大路書房)
- Lahey, L., Souvaine, E., Kegan, R., Goodman, R., & Felix, S. (1988). *A guide to the subject-object interview: Its administration and interpretation*. unpublished manuscript, Harvard Graduate School of Education.
- 溝上慎一 (編著) (2001). 大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学— ナカニシヤ出版
- 水本深喜・山根律子 (2010). 青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味: 精神的自立・精神的適応性との関連性から 発達心理学研究, 21, 254-265.
- 西村詩織 (2009). 日常生活で体験される焦りのプロセス—成人期前期の焦りに注目して— 心理学研究, 80, 381-388.
- 岡本依子・菅野幸恵・根ヶ山光一 (2003). 胎動に対する語りにみられる妊娠期の主観的な母子関係: 胎動日記における胎児への意味づけ 発達心理学研究, 14, 64-76.
- 齋藤 信 (2008). 主体-客体面接日本語版の検討—Keganの構造発達理論に基づいて— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 55, 57-69.
- 齋藤 信 (2009). 大学生の自己の発達に影響を与える領域—主体-客体面接で語られたテーマ領域の検討— 日本発達心理学会第20回大会発表論文集, 368.
- 齋藤 信・杉本英晴・亀田 研・平石賢二 (2011). 大学生における自己の構造発達—Keganの構造発達理論に基づいて— 青年心理学研究, 23, 37-54.
- 坂井敬子 (2006). 職業確立段階の有職者を対象にした転職理由の検討—キャリアおよび生涯発達の観点から— キャリアデザイン研究, 2, 18-30.
- 坂井敬子 (2007). 成人前期 (25-39歳) 有職者における転職観の検討 キャリアデザイン研究, 3, 5-14.
- 坂井敬子・半澤礼之 (2008). 成人前期 (25-39歳) 有職者における仕事意味づけと目標意識 心理学研究,

79, 60-65.

- 白井利明 (2008). 学校から社会への移行 教育心理学年報 (2007年度), 47, 159-169.
- 東海林麗香 (2006). 夫婦間葛藤への対処における譲歩の機能: 新婚女性によって語られた意味づけ過程に焦点を当てて 発達心理学研究, 17, 1-13.
- 東海林麗香 (2009). 持続的関係における葛藤への意味づけの変化: 新婚夫婦における反復的な夫婦間葛藤に焦点を当てて 発達心理学研究, 20, 299-310.
- Vaillant, G.E. (1977). *Adaptation to life*. Boston: Little, Brown.
- 渡邊ひとみ・内山伊知郎 (2011). 独身勤労女性のライフコース選択と生活領域からみたアイデンティティとの関連 発達心理学研究, 22, 189-199.
- 山田剛史 (2004). 現代大学生における自己形成とアイデンティティ—日常的活動とその文脈の観点から— 教育心理学研究, 52, 402-413.

付記

本論文をまとめるにあたりご指導・ご助言を頂いた名古屋大学大学院教育発達科学研究科の平石賢二先生, 多くのご協力を頂いた名古屋大学大学院教育発達科学研究科の亀田 研さんと早稲田大学人間科学学術院の杉本英晴さんに厚く御礼申し上げます。また面接の実施を手伝って下さった名古屋大学大学院教育発達科学研究科の藤江里衣子さん, 逐語録作成を手伝って下さった名古屋大学教育学部の皆様にも厚く御礼申し上げます。さらに参加者募集にご尽力下さった佐藤仁美さん, 畠山輝敏さん, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科の安永和央さんに謝意を表します。最後になりましたがお忙しいお時間の中で調査に参加して下さいました皆様に厚く御礼申し上げます。

(2011年9月30日受稿)

ABSTRACT

Categories of contexts which influence self-development in young adulthood:
Based on examination of categories of topics narrated in Subject-Object Interview

Makoto SAITOH

This study examined the categories of context which influence self-development among Japanese young adults. The Japanese version of the Subject-Object Interview (“SOI”) was administered to 40 young adults (age: 25-35 years) in Japan. The categories of topics narrated by participants in the SOI were examined. Results indicated that more young adults narrated categories of “Vocation & Work” and “Family & Relative” in the interview relative to university students. Furthermore, it would appear that Japanese young adults work on developmental tasks of young adulthood in the contexts related to important life events peculiar to their developmental stage based on examination of categories of “Vocation & Work” and “Family & Relative”.